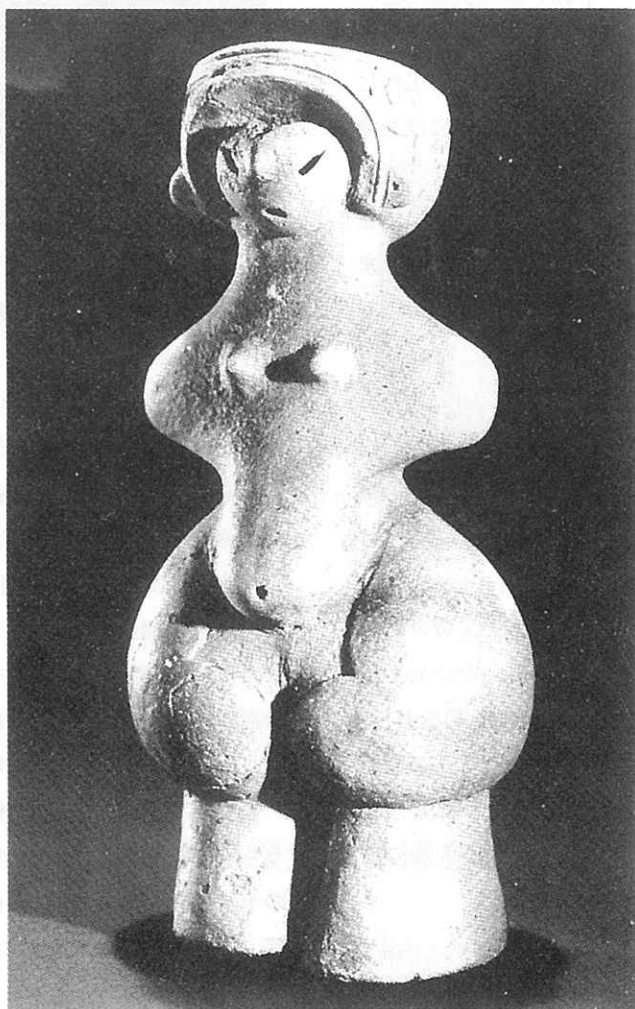


常滑市民俗資料館

友の会だより

第12号



妊娠土偶(縄文のビーナス)、長野県茅野市尖石考古館蔵

平成4年9月発行(1992)

黄砂の夢

水野平吉

昭和9、10年と2ヶ年ほど、内蒙古ゴビ砂漠の入口、満州洮南に兵役で駐屯したことがある。

洮南より西は、見渡す限りの砂原である、極寒（零下25度）の季節が終ると、4月から5月にかけて昼なおうす暗い、猛烈な砂嵐が吹き荒れる所謂、黄塵万丈である、それが終ると原は、うす緑を帯び、やがて待ちかまえていたように、草々が萌え出し緑の草原となる。

私達、騎兵隊は内蒙古の奥深く、治安工作に出かけた、草原で暫し小休止をし、馬に草を喰ませつゝ、ふと見る辺りの草々が、なんと温暖な知多半島の山野、田の畦畔で見る稲科の“雀のてっぽう”“雀のヒエ”等、名も知らぬ雑草まで、みな見覚えのある草々ではないか、眼を瞠っておどろいた、わけて茎の直立した、暗紅紫色の小花をつけた吾亦紅ワレモコウもあるではないか、而も毛布を敷いたように、吾亦紅の群生している処もある、当時、私は不思議におもい、郷里の母に、草原の草々を押花にして、手紙と共に送った事を思い出す。

又、晩秋の季節の変わり期ときになると、黄砂の定期便が訪れ、2・3回吹き荒れる。今にして思えば当然である、黄砂が日本列島まで舞つちふるとき、草原の雑草孢子も共に、飛んで来ることが考えられる、雨量の多い温暖な知多で一斉に繁殖したに違いない、知多半島も黄塵による大陸の影響を享けていることに、思い至った。



撫順城——、昭和12年から終戦まで、撫順で製陶業を営んでいた、偶々“撫順史話”の著者、渡辺三三先生（撫順図書館長）のお誘いで、撫順城趾（明代）の発掘のお手伝いをした事があカンる、当時“ジンギス汗は源義経である”という

著書が、中央で発刊された、先生が兼々実地調査された碑文、年代等を列挙反論された事がある、話はわき道に入るが——反論の主意は、秀吉の朝鮮進攻の折、小西行長軍が漢城（平壤）



撫順城の城門

を退くとき、明、朝鮮合同軍に多数の捕虜となった、明軍は日本軍の武道の質の高いことに驚き、捕虜を満州各地に分散帰農させた、それらの武士の墓石が、内蒙古に近い村落で後年発見され、定紋さよりんどうの笹竜胆が彫られていた事が、義経説の発端である、と結んでいる。

話をもどす——明の築城には一つの定まった様式がある、城の規模に従って城門より方角、距離を計り厨房の位置と定め、先生が指示され私達はその場所を堀った。目的は城内で使用された碗皿等の陶片である、その折、“この附近の黄砂の堆積は、1ヶ年で3耗、100年で30種だよ”つまり、550年前の地表は約1.6米下である。

先生の声が今も耳朶に残る、堀り進めてゆくうちに、最初陶片を見つけた深さは、正に先生の予言通りであった。後日、出土した明代の青磁、赤絵、染付等陶片の美しい絵柄の一部を、磨り丸め、ブローチを作った記憶がある。

それ以来、静かに撫順附近を見直してみると中国人の造っている青磚（黒レンガ）青瓦（黒瓦）も民家の日干しレンガも、みな露天で作っているが、亀裂が少ない、黄砂の粘土である、

まるで黄砂の中で生活が営まれている、黄塵万丈は自然現象であり、心に留めることなく過ぎていた私に、黄砂への関心を育ませた。



沖縄の赤土——千円を握り締め、撫順から常滑に引揚げ、漸く半田市板山町に工場らしきものを構えた昭和41年頃、復帰前の沖縄の瓦屋、奥原製陶から赤土（瓦土）が3屯ほど送られて来た、陶製ブロックを試作して貰いたいとの事である、沖縄の赤土は三河の瓦土より粘力が乏しく、微粒は砂質で収縮も少ない、先ず単味で真空成形機を用いブロック（400×200×150耗25耗厚）を30個程押出成形してみた。在来法で常温の部屋に、2日間放置後乾燥室に入れた。試みに5個ほど成形直後、窯上の乾燥室に入れてみた、翌日、どの程度の亀裂が生じているか調べにいった処、驚いたことに5個共、無疵^{きず}である眼を疑った。その後、小細工的な配合を止め、残土全部単味で成形、乾燥、施釉、焼成（1,160℃）した。知多半島の赤土の先入観が、見事打破られ、全製品満足な結果であった。

沖縄から奥原さんが来常され、喜んで貰った、その折、沖縄の赤土採掘場の状況、製土方法等詳しく聞くことが出来た、“もともと沖縄は珊瑚礁の島で、高い山は少く、母岩が風化し水に運ばれて堆積した通常の粘土の生成と異って、遙か古代から中国大陸の黄砂が飛来、堆積したものである云々” 沖縄も文化だけでなく、自然の地形も黄砂という大陸からの訪問客の影響をうけつゝ、生活、歴史が営まれていることが想像された。



島根県三子山の硅砂——生業を息子達に任せようになり、最近急に永年温めて来た黄砂への関心が燃え上り、平成3年島根県江津市の鑄物砂業者の案内で、隣町温泉津町三子山（587m）

の砂取場と、石見瓦の粘土採掘場の視察に出掛けた。

現場に到着して、思わず声を挙げて一驚した、風に運ばれた黄砂の堆積が30mの高さで、砂取現場が見事に直立している。それは粘土生成の見本板のような断崖光景である。

まず、雨水は粘土生成の育ての親である、堆積した砂粒に滲み込む、雨水は大気中の二酸化炭素を溶し込んでいるため、弱い酸性を保っている、地衣類のカビやバクテリアなど微生物の生活を可能にし、彼らは呼吸をしながら、二酸化炭素を吐き出し、水の酸性を強める、この水が砂粒の間に流れ込んで、砂粒と付着土を分解する、こうしたメカニズムによって、堆積砂粒の或る部分は粘土化される、それが石見地方の瓦粘土であり、教材のような断面壁である。

この地方の粘土も、黄砂より成熟されたものであると、私なりの判断をして満足した。



前置きが長くなった、知多地方が1年間に0.5耗黄砂が降下したとすれば100年で50耗、2,000



撫順の水野工場

年で1米堆積したことになる。

知多半島は古代東海湖の海底から、隆起したものとされる。頁岩粘土は海底で堆積して出来た粘土である、従って可溶性塩類を多量に含有している。瀬戸、東濃地方の木節粘土は、地上の花崗岩が風化、水に運ばれ沈澱したもので

塩類は極めて少ない。

また、内モンゴゴビ砂漠より飛来する黄砂も、且て、中央アジアの地中海といわれたゴビ砂漠地方も、ヒマラヤ造山運動の第三紀代に海底が隆起し干上り、海水は或る場所に片寄り溜って凝縮され、岩塩となった、湖底は天日に晒され気の遠くなるような時間、雨に洗われ、風化し続けて砂漠化したと言われる。

その粘土にまぶされた砂粒が、黄砂である、これまた可溶性塩類は極めて少く且つ時効を経ている。黄砂の成熟粘土化されたものは、適当な微砂が混入していて、収縮が小さく、亀裂が

生じ難い、満州に於ける黒レンガ、黒瓦、日干レンガも、野天で造られても、乾燥切れが極めて少い、知多半島に於ける平安、鎌倉の大甍、壺も、おそらく野天で造られたと、思われるが焼成疵こそあるが、乾燥時の亀裂痕の少いことが、出土品は物語っている。

知多窯の出土品を見るたびに、黄砂と重ね合わせて、当時の陶工達が黄砂より成熟した粘土を撰択していた智恵に、頭を下げる。

“知多窯の大甍も壺も、黄砂で造られたものだ”と私は黄砂への夢を追う。

越前三国浦 藤右衛門漂流之記

増田 静子

古文書に親しみ、やっと少し読める様になると、昔の人の生活が浮び出て来て楽しいものです。面白く読める古文書の一つに漂流記があります。「越前国三国浦藤右衛門漂流記」というのを少し紹介して見ましょう。



越前三国浦（明治末期）

『韃靼・大明・朝鮮三ヶ国物語の事 越前国三国浦新保村にて竹内藤右衛門、同子、藤蔵船二艘同国兵右衛門船老艘已上三艘人数五拾八人乗て松前江為商出船致候所海上にて難風に逢ひ韃靼国江吹付けられ同州の都江召寄せられ夫より大明の北京江送られ又夫より朝鮮国のみやこ江おくられ宗対島守殿家来古川猪右衛門江渡され夫

より対島江着申候』

これが事の要約でこれから話が始まります。

正保三年（家光の時代の終頃）4月越前三国浦を出船した3艘は、能登のへくら島で15日程、佐渡で20日余り日和待をし、佐渡を出船した夜大風に逢い、15、6日目に何国とも分らない所へ吹寄せられ、島の住民らしき者が小舟で寄って来たので、手真似でこちらの舟に乗せ御馳走をしたら、人参を持って来て鍋と交換してほしいという。人参は沢山あるかと尋ねたら、山に行けば沢山あるという（これは朝鮮人参らしい）。翌朝島の者が3人来たので、案内させて山に登る。14人を船に残し44人が登る。

『海上にて難風に逢候節龍神江祈誓の為各刀脇差不残海中江入申候付皆々丸腰にて登り申候』

行った所が萱原で変だと思った時、周囲から弓を射かけられ殺され、船に残った者も船を焼かれ2人だけ助かった。助かった者15人、村へ連れて行かれ畑仕事などをさせられている所、他所から侍らしき人が来て、日本人を見ている尋ねて帰って行き、20日程して10人余りの

侍が来て村の者3人を召捕日本人と共に馬で連れて行かれ、35日目に着いた所が韃靼の都。そこでいろいろ調べられ手真似身ぶりて話をし、日本人は悪い事をしに来たのではない事、大風に吹流され島へ着いた事などわかってもらう。連れて来られた村の3人の者は、

『着物を脱しうつむけに寝させ大竹のいかにも性の厚き削りたるにて尻と腰との間五十宛強く叩かせ半死半生の体に見え候韃靼の科の軽重によって数を定たき申候由に御座候其後日本の者共殊の外御懇意に被成着類等被下御馳走被仰付候韃靼の都に廿日余居申候』

それから馬に乗せられ、15人が2人3人と別々に大名らしき人に連れられ北京へ向う。

30日から40日程で着く。

『其時分ハ申ノ十一月と十月の間にて御座候韃靼の都に居申候間ハ朝夕の飯ハ賄人に被仰付下され候上下とも粟の飯にて米ハ一切無之候』

大明の北京へ行き宿を決められ、日本人1人に人足3人付、白米1日1升豚の肉1斤麦粉そば粉酒肴野菜味噌塩薪等を1日分宛渡され、ふとん着物も貰う。

『酉の年五月にも成申候我等談合仕候ハ何程御馳走被成候ても日本江帰り度候間たとへ殺され候とも無是非日本江帰り度由訴詔可仕と申合五月五日大明も礼日にて御座候を心懸奉行所江訴詔仕御聞届被下衛婦シ可被成由被仰付其頃ハ詞も大方聞知申候我等共申事も大方御聞知候故右の通りにて同年霜月迄待居候』

11月5日呼出され羊の皮の着物と下着肌袴帷

子足袋くつ下迄貰って、10日頃出発と言われる。11日になり馬を与えられ、龍の紋のついた大旗2本、白小旗8本、赤小旗4本、笠ぼこ2、3本等を立て、唐の礼式にて人数100人程の行列で、朝鮮国の境に12月9日に着く。朝鮮から200人程出迎え、大明から来た10人と28日に朝鮮の都へ着く。こゝで新年を迎え正月7日に出発、10日程してシンサツという大名に御馳走になり、紙五帖蓆五斤宛もらう。それからトウネンという所に28日に着く。こゝでも紙二帖串柿十五連米五俵干鰯二百枚酒肴味噌塩もらう。そして、

『宗対島守殿内古川猪右衛門殿に御目に懸り韃靼並大明の話御聞候て対島守殿御家老衆江御状被添古川猪右衛門殿より酒肴一駄椎茸一升並するめ百枚紙十五束昆布二百枚金平糖拾斤きせる二拾本長命草三拾箱被下候三月十七日対島の鰯洲と申所江着申候同廿二日府中江着対島守殿より御賄被仰付色々御馳走難尽候木綿拾拾五枚下帯拾五筋帷子十五被下候六月二日に対島を出同十六日に大阪江着申候』

これでやっと帰り着きました。43人の仲間が殺されたが、生き残った15人は優遇され、送り返されて、半田督乗丸の様に1年3ヶ月も海に漂流し、病気で10人が舟で死に、英国船に救われて帰る途中に1人死に2人だけが帰った事から見れば、まだ運がよかったと言えるかも知れない。この続きに食事の事、住家の事、衣服の事、言葉の事、万里の長城と思われる事も書いてあります。

平和の島の“やきもの”はいま(一)

—大久野島・元毒ガス島から—

村 上 初 一

真夏の暑い陽がカッと照りつける昼前、呉線の忠海(たづのうみ)駅に下り、人影の少ない

田舎道を少し行くと、渡船場の小さな栈橋があった。栈橋前に長い軍刀を下げ、肩から拳銃を下

げた憲兵が立っているのが異様な感じだ。一応憲兵の許可を貰って、間もなく着いた小さな汽船に乗り込む。

空は抜けるように青く、行く手に黒々と見える島影が目指す大久野島らしい。

その遥か彼方にも、近くにも大小の島々が霞んで見える瀬戸内海は、鏡のように凧いで正に一幅の絵のような美しさだ。しかし目の届く限り殆ど魚船ひとつ姿が無く、よく澄んだ海中に小魚一匹見えないのと、深く澄んだ海の中に海藻など全く見えないのが不思議に思えた。

時は昭和17年（1942）8月、国民大衆はまだミッドウェーで我が連合艦隊が大敗を喫したことは全く知らされず、ほんの最近アメリカ軍が南海の孤島ガダルカナルに大挙上陸して来て、守備する日本軍と激戦を展開していることと、その周辺のソロモン海域で海戦が行われたことなども大本営の発表で僅かに知らされていた程度で、まだ勝ち戦さの明るいムードの中で、かねて受注していた耐酸炉器の納入打ち合せの為、広島から今日一日がかりで大久野島の東京第二陸軍造兵廠忠海製造所を訪れたわけだ。

快適な船旅も僅か15分足らずで島の栈橋へ着く、山を背に幾つもの建物が並んでいるのが工場のような、上陸してすぐ守衛の詰所で、来意を告げると、真新しいガランとして何も無い部屋へ通される。

案内される途中ちらっと見えた作業員が、全部首から防毒マスクを下げているのは、余程毒性の強いものを取扱っているようだ。

待つ程もなく陸軍少尉の階級章を付けた技術将校が姿を見せた。まだ大学を出て日が浅らしい若い将校で、用件が済むと次の船が出るまで少し時間があるので、昼飯でも食べて帰りなさいと言い、こゝのうどんは旨いですよと、にっこり笑った。

今まで度々行った呉の海軍工廠でも、徳山の第三海軍燃料廠でも、昼飯をよばれるなどいまだかつて無かっただけに、少尉の言う通り食糧事情の悪い今どきの街では、絶対口に入らない真っ白なうどんをご馳走になり、私は感激して



完全防毒具装着の工員

島を後にすることになった。

これは去年2月頃、常滑市民俗資料館友の会の渡邊榮造さんから、当時納入した耐酸炉器はどうなっているかご照会いただいた時、お聞きしたお話です。それは恰度、湾岸戦争で連合軍の進攻を受けたイラクが、大量の化学兵器を使用するのではないかと、世界中が大変心配していた頃でした。

渡邊さんのお話から、私は早速裏山の谷あい深く多量に捨てられている“やきもの”の破片を調べることにしました。

さて、この大久野島は、呉軍港の東の要として、明治34年(1900)にこの島の3か所に大砲が据付けられ、対岸の忠海と共に陸軍の要塞地帯と

して芸予要塞司令部の指揮下におかれました。

大正3年(1914年)第一次世界大戦の勃発で、ドイツに宣戦を布告した我が国は、この大砲を取外して青島(現中国山東省)のドイツ軍攻撃に使いました。

戦前、青島には忠海公園(チューハイパーク)と名付けられた記念公園があったといわれるところをみると、この大砲が相当威力を発揮したことがうかがわれます。

(広島県竹原市、大久野島毒ガス資料館長)



大久野島の遠望

衛生陶器の先達

鯉江俊三

明治45年に瀧田真一会長を中心とする当時の常滑町青年会から発行された、常滑陶磁器誌の49頁に上村信吉は白鷗の孫なり長ずるに及んで、水盤植木鉢等に動植物の浮模様が附することを創意せり、又便器の形を考案して作り始めしも此人なり、後には白鷗の名を襲ぐべき有望の人なりしが、諸国順遊中武蔵国秩父郡にて、文久2年4月3日歿せり、時に年49なりきと記されてある。

まさか方寿の父鯉江方救の建てた家で使われていた便器の、そして又これと組合せて後年方寿が専賣特許を申請し、その特許権を取得した無臭便器の腰掛の部分の作者が、誰あろう上村信吉であったとは、思いも掛けぬ事であった。所が平成2年INAX発行の「日本トイレ博物誌」を読んで見ると、その156頁に安政年間に瀬戸・常滑あたりで、それまでの木製便器の形を模した陶器製の角便器、朝顔型小便器、置便器が工夫されるとあり、更に昭和62年陶栄株式会社発行の「陶栄百年の回想」を読み直して見ると、これにはその191頁に正に安政元年(1854)上村信吉便器の形を考案製造すと、はっきり彼の名前が挙げられている。所で鯉江方救がその

證據となる便器を採用していた本宅を建てたのは、弘化3年(1846)であったから、これは正に当初は木製の物を使っていたが、この家を新築してより8年後の安政元年に至って、上村信吉が新しく陶製便器を創製するや、逸早く買求めて之と取替えたと言う事であろう。

尤も此頃になると方寿も既に34才となっており、彼の意見が大きく取り入れられた事とは思われる。そしてその後明治の時代に至りこの便器を設置した建物はよく話題に上る金島山上に移築され、当時国立の工部美術学校を卒業した内藤陽三や寺内信一を迎えて設立した常滑美術研究所の教室としても使われたと云われ、此処を訪れた井上馨や後藤新平或は県知事の勝間田稔等数々の賓客に対しても大いに陶製腰掛便器の効用を吹聴したと伝えられている。

一方考究心旺盛な方寿は信吉に負けじと明治21年に至り特許法が制定されるや逸早く、信吉の腰掛便器と組合せた無臭便槽を案出して、その年の11月28日附で、これが専賣特許権を取得しておるのである。尤もこれを設置した建物はその後、明治25年の11月には成岩の素封家に買取られ、便座や便槽のみ常滑に残されてその

後の鯉江家で使用していたが、今は常滑市民俗資料館に寄贈されて、此処の収蔵庫に無聊をか



防臭便器の浮模様

こちつゝ大切に保管されている訳である。

所で日本に於ける衛生陶器の濫觴とも云うべき此の便器の創製者が、今迄不問に附されていた、その重なる原因は、胴の部分に付けられている薄肉の彫刻が、方寿を始め内藤陽三・寺内信一と云った造形の名手の集る金島山に於いて

使用されていた事に依ると思われる訳であるが、今改めて常滑陶器誌52頁の10行目に目を注ぐと、獅子に牡丹、波に千鳥、唐草等の種々なる浮模様を附けたる品注文ありしが、偶々其座に在りたる滝田金左エ門是を引受け帰り実父与三左エ門に計りて制作し上村信吉をして附模様を為さしめ作り上げて送りしに、常滑に此の技あるかと非常な好評を受けたりと云う。是此地浮模様の始めなりとある。

正にここに語られる所の波に千鳥の浮模様云々に気付くのが如何にも遅かりしの恨みがあったが、兎に角この信吉こそは、今より178年前即ち文化11年(1814)に白鷗の孫として生れ、文久2年(1862)旅先にて歿すとある如く、惜しくも短命ではあったが、勝れた作陶活動に依って後世に大きく貢献した一人として、永く常滑陶器史上に輝く名を遺すべき人であり、その功績は遺品と共に伝えられたいと願ふ次第である。

春の信州方面旅行記

—5月7日葉桜の高遠、諏訪大社そして尖石へ—

増田 静子

5月7日、44名、資料館友の会として始めての1泊旅行、五月晴れとはいかず少し心配な天気乍ら、胸をふくらませて出発する。窓の外は北に向うにつれ山が近づき、山肌に吹き出した様な新緑、八重桜もたわわに咲いている。

高遠へ着き野沢茶漬もある昼食をゆっくり戴き、高遠城跡を見学、物見櫓の様なのが立っている。此所はコヒガン桜が明治初期に1,200本程も植えられ、花の時期にはよく賑わうそうだが今は葉桜となり青々としている。

高台なので町を見下ろす景観のよい所。そこを降りて絵島の^{かこみ}囲屋敷を見る。閑静な家と見ながら入って行くと、控の間で5人程が常駐し番をしたとか長押には檜を掛けた跡もあり、その

奥に絵島が入れられた部屋がある。8畳間で廊下がありその端に御湯殿とあるけれど、一週間に一度位の行水だそう。廊下には格子が嵌込まれ出られない様になっている。

絵島が高遠へ立つ前に詠んだ歌「浮世にはまた帰らぬや武蔵野の月の光に影もはずかし」もう帰れないかも知れないと覚悟したのだろうか。身の廻りの事は下女が付いているが、書く事も許されなかったとか、監視の中28年間をこの部屋で過ごし、61才で亡くなったそうだ。実際には生島との事も定かでなく7代將軍家継が6才の時、將軍継嗣問題で御生母月光院に仕える絵島達が犠牲になったというのが本当らしい。

“葉桜や江島の部屋の牢格子”



諏訪大社本宮前にて

家継は8才で亡くなり吉宗の時代となる。「いにしへの流人の悲話をおもふ眼にしぐれすぎゆく高遠の山」の歌碑が建っていた。資料館には藩に関する色々が展示されている。

北へ向かうと桜がまだ残っていて楽しい。諏訪大社上社本宮、大きな狛犬の間を行くと左に新しい御柱が先に御幣を付けて立っている。寅と申の年に立替えられるそうで今年は御柱祭の年に当る。

“御柱しるき諏訪社のたゝずまい”

もう少し左へ行くと又一本、これは社殿を囲み4本建てられているようで、上社本宮と前宮、下社春宮と秋宮の4社で計16本との事、諏訪社には本殿に当たるものはなく、盤座樹木をもって神体としているようで、御柱の起源は縄文時代の巨木信仰にあるらしい。

八ヶ岳山麓の御小屋山から伐採した木を曳き一直線に進むのだそうで、テレビでよく見る木落としの急坂、宮川を渡る川越え、そして里曳きとなり、社殿の周囲に建てられるとの事。怪我人や時には死者も出る勇壮な祭の様だ。

第2の柱の所から回廊を通して拝幣殿前にてお参りする。拝幣殿には小さい子供を連れた人が座り、神官が2人程儀式を行っている。健康を祈っているのであろうか。手洗場に

は竜がお湯を吹き出していた。

尖石^{とがりいし}考古館は山手へ入った八ヶ岳山麓の静かな所にある。考古館から少し離れた所に、高さ一米程の三角錐状の岩があるようで、石器を研いだ様な跡があり砥石という説もあって、尖石遺跡の名はこの石からだそう。かつては「とがり石さま」として信仰の対象となっていたという。

まず石器時代黒曜石を割った鋭いナイフの様な物、鏃などの道具類の展示。縄文土器は一万年位前から四千年位前迄、沢山の壺が並べられている。初期のは簡単だけれど、前期（七千年位前）から中期（五千年位前）にかけて飾りが沢山ついて、貝の飾り、蛇の飾り、人面飾り等豪華なものである。又縄文のビーナスと言われる妊娠土偶は、写真で見た事はあるけれど、実物は思っていたより小さく可愛らしい。

“縄文人の生きの証しの土器いく百

美的感覚今に劣らず” 水野美代子

後期は飾りが少なくなり実用的になったとか。皆造形模様が素晴らしい。体験コーナーでは、粘土に、縄を巻いた棒を転がして模様をつけ、ギザギザの木で筋をつけて楽しむ。



愛知労済車山高原保養センター全景

見学を終り、今日の宿、愛知労済車山高原保養センターへ向う。標高1,300米位、上がって行くにつれ、スキー宿らしく洒落た建物が建ち並

ぶ所の、上の方にある3階建ての白い大きな宿に着く。衣川俊平氏がお世話下さって、泊まることが出来たこの建物は、衣川氏が労済の理事長をなさっていられた時に、衣川氏の設計で建てられたそうで、入口の柱に名前が刻まれている。寒い所なので苦労も多かったそうだ。

—5月8日松本城・平出遺跡そして牛伏寺ごふくに参って—

肥田花子

さわやかな朝の目覚めに気分は上々…車山高原の冷えた空気を満喫して、保養センターを八時半出発。霧ヶ峯ビーナスラインは深い霧に閉ざされて楽しむには無理。一路松本へ向かう。会員達が話に花を咲かせている間も、流石ベテランの運転手さんは慎重運転で濃霧の山をスムーズくだに下り予定通り松本に着く…。まず諏訪大社の下社に詣でる。昨日の上社と併せて諏訪大社の説明は増田さんが詳細を尽くされている。いずれ甲乙つけ難い壮重且つ森厳なたたずまいに自ずと深く頭がさがる。

御柱は、明日たてるとか聞いたが、今日は冷えた静けさの中にあり人の姿も少ない。

“みすずかる信濃の国の諏訪大社

みたらい
御洗水ぬくし温泉にして” 大沢よし子

次いで松本城。平城ひらしろながら、国宝松本城は、どっしりした風格を備え、五層六階の華麗な容



松本城

部屋や食堂から見える景色は、八ヶ岳と思われるまだ雪の残る山も見え満足する。夕食は、たらの芽など山菜の天ぷらもあり、鴨鍋でおいしく戴き、気持良くお湯に浸って今日の疲れを落し、明日の旅を思い乍ら、暖房のきいた部屋で眠りに就く。

姿は辺りを払うばかり。満々と水を湛えた堀には、美しい背を見せて錦鯉が無心に泳ぎ回り朱塗りも鮮やかな橋を渡りきると、手入れの届いた庭園がさっと目に展ける。色とりどりの牡丹の花が今を盛りと研を競い、家族連れのをぞろ歩きも楽しげに見える。

仄暗い城内の急な階段を手摺りに掴まり乍ら登って行く、階ごとに、戦国の世を偲ばせる品々の展示品が目につく。具足、鯨瓦、島原合戦やその他の絵図、古書のかずかず、中でもその頃飛道具と言われ、最新の兵器として珍重された鉄砲がずらりと並び、生産地や作者名が詳しく説明されてあった。鉄砲の数が戦いの勝敗を決めた当時は今に思えば隔世の感がある。

石落しの窓や物見の窓の僅かな明かりだけの城内は、暗ぐらとして武具に身を固めた武将の幻が見えて来そうな錯覚に捉らわれる。

天正10年(1580)小笠原貞慶が、武田より奪回した深志城を改め松本城と命名、それより整備した城下町一帯を松本と呼ぶ。

豊臣秀吉が天下統一を果してその治下となり小笠原は天正18年に移封し、代って石川数正かずまさが入城。数正は、徳川の功臣且つ重臣で、秀吉との外渉に心を砕いた人であるが、複雑ないきさつから出奔して秀吉の許に仕えた。我が子康長と共に城の天守閣造営に尽くしたが、間もなく死亡。康長も長くは続かず、徳川が天下を掌握

して後、慶長18年には改易された。

それより松本城は転々と主を代え、明治に至るまでに、20名からの城主の名が挙げられている。幾百年の歴史を黙して語らず、松本市の象徴として、今も亭々とある松本城は市民第一の誇りとするところ。隣接の日本民俗資料館松本博物館を見学する。此処は、郷土の民芸品、農耕具、松代焼などのほか、古時計その他の文化財級のコレクションが広い館内にずらりと並び見ごたえ十二分。少し遅れた昼食に舌鼓を打ち次の予定地へ…。平出遺跡の考古館は昨日の尖石と共に日本三大遺跡と数えられる遺跡物が保存されているだけに、古代出土品が一杯だが尖石と大差ないケースなので、ここでは省略して殊に印象深かった古代人の復元住居を紹介。古墳時代の住人の知恵というか軒深い分厚なかやぶき屋根の中は目の馴れぬ中は、まるで暗闇。この中で原人達は自給自足の暮らしに、間仕切りもない小舎の中でひっそり寄りそって生命をつないで来たのであろうか。自然の中に現代人の知らぬ俤を求めて…。

最後の見学先、牛伏寺は、聖徳太子の発願により創建、寺伝に依れば、唐の玄宗皇帝より信濃の善光寺に寄贈された大般若経を、牛車で運ぶ途中、体力尽きた牛が動かなくなり、困り果てた従者が当寺に経巻を納めたとあり、中興の祖、憲淳師によって現在地に寺を移築したとあ

る。天文3年の(1534)本尊十一面観音及び脇侍、釈迦三尊像など国の重文。外に古文書も多くあり、文化財として重要。斃れた牛を懇ろに供養したその余慶か牛伏観音といわれ、あらたかな御利益は多く庶民の信仰を集めるところ。帰りがけに俤の祈りをこめて鐘楼の鐘をつく。

“山やまに轟きわたれとつく鐘の

やさしく響く牛伏寺の庭” 小川たつ枝

長い参道を喘ぎ喘ぎ登った辛さも美しい鐘の音色に、身も心も浄化されたような軽い足どりになり、誰一人の落伍者もなくお参り出来たのも牛伏観音の御利益？。時々降り出す雨にも傘



土師式住居(復元)、平出遺跡考古博物館

を使うことなく。車上に眺めた遅咲きの桜や新緑の思い出を今も胸に尾をひかせて、一味も二味も違う信濃路の旅を無事に終え、一同心充たして帰路に着いた。皆さん大変お疲れ様でした。

下田の歴史散歩道を巡る

岩 橋 佐 治

朝8時頃、伊豆急の下田駅に下り。駅前の案内所で案内図を貰い、まだ人通りの少い町通りを歩き始めると、身軽な服装で足取りも軽い。ほぼ10分で鶴松の墓のあろう稲田寺に着く。墓石は高さが4尺(1.2m)程で小さく、参る人も少ないようだ。次は唐人記念館へ向う。記念館

には早くも4、50人の団体客が来ていて、一緒に説明を聞きながら館内を一周。お吉の一代記絵巻や身の廻り品、それにハリス関係の品々を見て裏手、宝福寺のお吉の墓に参る。その横に鶴松の墓が仲良く並んでいるのが微笑ましい。

明治23年3月23日(1890) 渕へ身を投げて50

年の生涯を閉じたお吉を哀れに思い、当寺の竹岡大乘師が、死んだ者に罪は無い。その霊を安んじさせねばと、懇ろに院内へ葬ったといわれる。

それから40年近い年月が流れた昭和3年(1928)、十一谷義三郎の著した“唐人お吉”を水谷八重子や市川松蔭が劇化し、一度に世の反響を呼んだことから、彼等が現在の墓や灯籠を寄進したものだといわれ、爾来悲運のお吉を哀れんで、お参りの人で香華が絶えないようである。

〱駕籠で行くのはお吉じゃないか

下田港の春の雨

泣けば椿の花が散る

以前、三味線のつま引きで耳にした端唄を口



唐人お吉記念館

ずさみながら、次の、初代下田奉行で三河田原城主の先祖といわれる戸田忠次の墓地へ赴く。参拝を終えると、その近くにある吉田松陰が拘禁された長寿寺へ行く。松陰はペリーの軍艦で密航を企だて、失敗してここに一旦捕らわれの身を寄せたという。今は廃寺となった庭の大きな蘇鉄が印象的だった。

こゝを後にして小川に架かる小さな橋を渡ると我が国が初めて外国と条約を調印（日米和親条約、安政元年、1854）した了仙寺がある。立派な宝物館は大変な賑わいだった。展示品の中に性関係の秘具が多いのに一驚。

さて、その横の坂を登ると下田の町が一望できる風光明媚な長楽寺へ着く。日露和親条約（安政元年）を調印した場所だという。

坂を下り、その横から再び登ると下岡蓮杖の碑があった。彼はヒュースケンに写真術のの手解きを受け、横浜に出て宣教師から更に高度の技術を学んだ本邦最初の写真師である。

そこから更に坂道を登りつめた処に下田公園があって、その一角に吉田茂元首相揮毫の開国記念碑と、ハリスやペリーのレリーフ像が建てられて、大勢の人々で賑わっていた。

そこを見終わって、今を盛りの藤の花のトンネルをくぐって行くと、ペリーの胸像と米海軍寄贈の錨が置かれたペリー上陸の地に出る。

たくさんの船が静かに停泊する下田の港を見ながら唐人お吉が開いた小料理屋、安直楼を訪れる。明治15年（1882）開業したものの、数年で店仕舞をして人手に渡った気の毒な運命を辿るこの店を最後に、僅か半日の散策ではあったも、私には中味の濃い充実した旅を終ることになった。

表紙紹介 昭和61年茅野市棚畑遺跡で発掘、縄文時代（紀元前約5千年前）の作、背丈27cm、当時のものとしては大きな作品といわれている。平成元年、国の重要文化財に指定される。（8頁ご参照）

人事異動 去る4月、長い間ご協力頂いた当資料館の角野正昇さんが本庁の市民課へ転出されました。深く感謝いたします。その後をうけて新たに着任された山本敏一さんは、約30年の長きに亘り市の図書館、税務課などの業務を歴任してきたベテランです。この紙上をかりて引き続きご協力賜りますようお願いいたします。

第12号、平成4年（1992）9月25日発行、発行所 常滑市民俗資料館友の会、常滑市瀬木町4-203
電話（0569）34-5290 編集担当者 渡邊 榮造 印刷 株式会社 興起社